

岩手県に於ける児童の遊びの現状

—— 市部と郡部の比較 ——

武田京子*

(1996年12月9日受理)

Kyoko TAKEDA

The Present Condition of Children's Play in Iwate Prefecture

— A Comparison of Urban and Rural Districts —

子ども達の遊びが環境の変化にともなう、量・質ともに変化が現れていると言われている。岩手県の子どもの遊びの実態把握のための調査を行った。

遊び時間、場所、仲間ともに小規模化の傾向が見られる。児童自身は現状に不満を持ちながらも、工夫しながら遊んでいる。保護者は児童の遊びの現状について楽観的である。

[キーワード] 遊び時間、遊び場所、友だち、遊びに対する意識

1. はじめに

人間にとって、遊びは欠くべからざるものといわれている。特に、子どもにとっては、生活全体そのものであると言われ、遊びによって多くの事柄を学び、習得すると考えられている。しかし、近年、子どもが遊ばなくなったとか、遊べない子どもが増えてきたと言われている。その原因として仙田満氏は、遊び環境に関わる4つの要素(時間、空間、集団、方法)の変化を挙げ、相互に影響しあっています悪化の傾向を示していると言う。遊びの要素に影響を与えるのは、社会構造、文化構造、都市構造であり、それぞれの要素として、社会構造には地域社会の衰退、核家族化、産業形態の変化、少子化など、文化構造には情報化、合理主義、消費主義、知育主義、安全第一主義などが、都市構造には自然の喪失、車優先主義、住宅の合理化、都市の効率機能化などを具体的に挙げている。これらの変化は、第一段階として1960年をピークとした日本の高度成長期に都市化によって子どもの遊び空間の減少と言う形を取り、テレビの影響、核家族化、地域社会とのつながりの希薄化にともない遊び集団の減少を見た。第二段階は1980年から始まり、小さくなった遊び空間がさらに分解を始め、遊び時間の減少、遊びの内容の変化を見せている。第一の変化が縮小の変化というならば、第二の変化は質的な変化といえるであろう。子ども達は屋外から室内

*岩手大学教育学部家政科

へと閉じこもって遊ぶようになり、遊び仲間も少人数化、同年令・均一化が進んでいる。そして、子どもの遊び環境の急激な変化は都市よりも地方で、地方よりも田舎で著しいという。そこで、大都会と比較すると自然環境もまだ良いとされる岩手県に於ける小学校児童の遊びの状況がどのようなになっているかについて、市部と郡部で調査を行い考察した。

2. 調査の方法

①調査の目的

岩手県盛岡市と郡部の小学生と保護者を対象とし、遊びに関わる時間、空間、仲間、意識を調査し、遊び環境の現状と問題点を把握する。

②調査期間

1994年9-10月

③調査方法

質問紙法（学校を経由して各家庭に配布、回答後回収）

④調査地域

市部：岩手県盛岡市 人口 285,357人（1995年1月1日現在）

郡部：岩手県東磐井郡藤沢町 人口 11,090人（1994年7月現在）

⑤調査対象

盛岡市M小学校 4-6年生児童とその保護者 920名

藤沢町F小学校 4-6年生児童とその保護者 300名

○小学校 4-6年生児童とその保護者 218名

H小学校 4-6年生児童とその保護者 92名

⑥調査有効率

盛岡市M小学校：児童 437名（95.0%）、保護者 433名（94.1%）

藤沢町F小学校：児童 145名（96.7%）、保護者 125名（83.3%）

○小学校：児童 105名（96.3%）、保護者 104名（95.4%）

H小学校：児童 45名（97.8%）、保護者 45名（97.8%）

3. 調査の結果

①調査対象の概要

表1に示した通りである。

表1 調査対象の概要

		性別	4年生	5年生	6年生	合計
市部	盛岡市立	男子	68	81	75	224
	M小学校	女子	79	72	63	214
郡部	藤沢町立	男子	33	24	22	79
	F小学校	女子	19	17	30	66
部	藤沢町立	男子	19	21	13	53
	O小学校	女子	13	18	21	52
合計		男子	24	132	118	374
		女子	19	119	121	359

②家族数・きょうだい数・家族構成・子ども部屋の有無

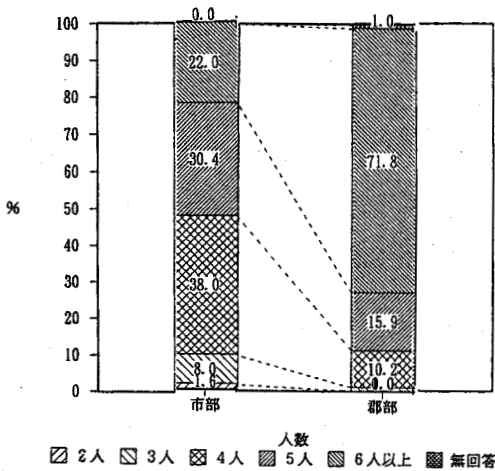


図1 家族人数別割合

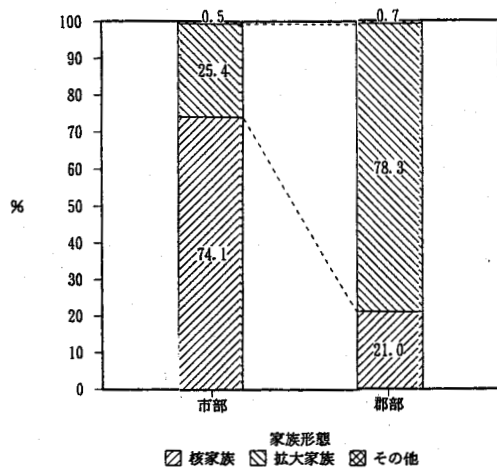


図2 家族形態別割合

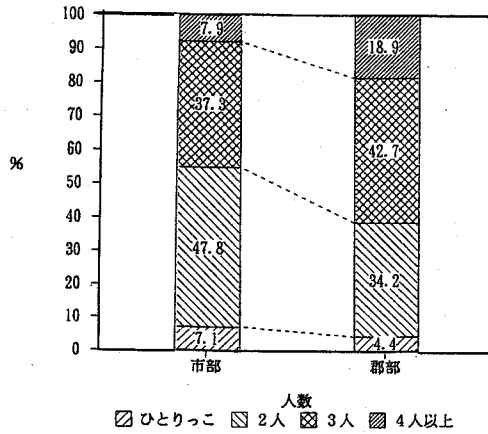


図3 きょうだい数別割合

図1-図3に示した通りである。平均家族数は市部4.73人、郡部6.25人であり郡部では6人以上の家族が71.8%を占めている。平均きょうだい数は市部2.48人、郡部2.82人である。市部では核家族および小家族傾向が強い。郡部の家族数の多さは、きょうだい数の多さによるものではなく、拡大家族を形成するためによるものである。子ども部屋の保有率は市部79.6%、郡部74.9%で差はあまりない。

表2-1 好きな遊び (学年別)

	順	4年生	5年生	6年生
市部	1	サッカー(19.7)	ゲーム(28.8)	ゲーム(25.5)
	2	ゲーム(15.6)	サッカー(23.5)	サッカー(24.1)
	3	バスケットボール(10.2)	バスケットボール(13.7)	バスケットボール(13.9)
	4	絵を描く(8.8)	野球(7.8)	ドッチボール(7.3)
	5	一輪車(6.8)	サイクリング(3.9)	野球(6.6)
郡部	1	サッカー(28.1)	ゲーム(32.7)	ゲーム(26.7)
	2	ゲーム(22.9)	サッカー(13.3)	T V視聴(22.8)
	3	バスケットボール(10.4)	バスケットボール(10.2)	サイクリング(8.9)
	4	T V視聴(5.2)	トランプ(8.2)	トランプ(6.9)
	5	絵を描く(3.1)	ハンドミントン(4.1)	バスケットボール(5.9)

(%)

表2-2 好きな遊び (男女別)

	順	男子	女子	全体
市部	1	サッカー(41.3)	ゲーム(15.9)	ゲーム(23.3)
	2	ゲーム(30.5)	バスケットボール(13.1)	サッカー(22.4)
	3	野球(13.5)	サイクリング(8.9)	バスケットボール(12.6)
	4	バスケットボール(12.1)	一輪車(8.4)	野球(6.9)
	5	ドッチボール(4.9)	絵を描く(7.9)	サイクリング(4.6)
郡部	1	ゲーム(40.0)	ゲーム(15.2)	ゲーム(27.8)
	2	サッカー(28.7)	T V視聴(15.2)	サッカー(15.3)
	3	バスケットボール(13.3)	トランプ(10.3)	T V視聴(9.8)
	4	サイクリング(6.0)	バスケットボール(4.1)	バスケットボール(8.8)
	5	T V視聴(4.7)	読書・絵・動物(3.4)	トランプ(5.4)

(%)

③遊びの実態 (好きな遊び)

表2-1に学年別、表2-2に男女別の好きな遊びを上位5位まで示した。

市部、郡部に共通して人気のある遊びはゲームとサッカーである。市部では遊びの種類が多く好み分散しているが、郡部では遊びの種類が限られ、特定の遊びに集中する傾向が見られる。また、遊びの項目にTV視聴が挙げられているのが特徴といえ、学年進行につれて増加の傾向が見られる。室内の遊びが市部と比較すると多い。また、好きな遊びが「特にない」と回答した児童は、女子に多く、郡部は市部の2倍の比率で見られた。特に郡部の5年生の女子の11.2%が「好きな遊びは特にない」と回答し、女子は好きな遊びが男子と異なり集中化せず分散しているためかも知れないが、好きな遊びの順位の3位にあたる比率となる。

④帰宅後に何をするか (したいか)

図4-1、4-2は、学校から帰宅後すること (実際) としたいこと (希望) である。

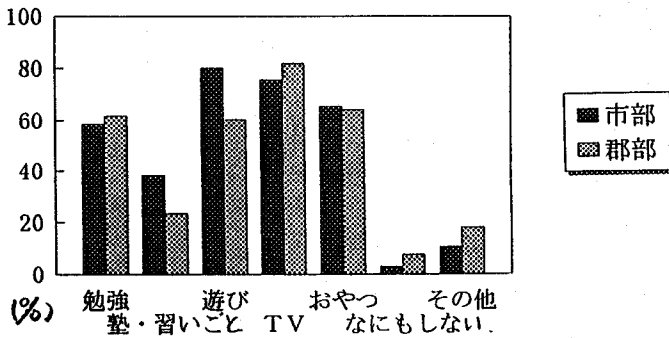


図4-1 帰宅後すること

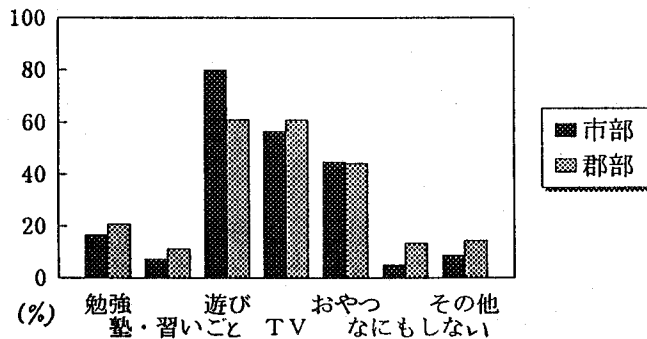


図4-2 帰宅後したいこと

したいことの中に、勉強、塾・習い事、何もしないを選択する児童は少ない。何かしたいけれど勉強や塾・習い事はやりたくない、ということである。実際と希望のズレが市部と郡部であった項目は、塾・習い事である。郡部では塾や習い事をする場所が少ないことによるものと考えられる。郡部の5年生では、「学校から帰ったら何もしたくない」の回答が30.6%で、郡部全体の13.2%、市部全体の4.8%と比較すると目立っている。

⑤生活時間

図5-1, 5-2, は週日のTV視聴時間, 勉強時間, 図5-3は塾・習い事について示している。

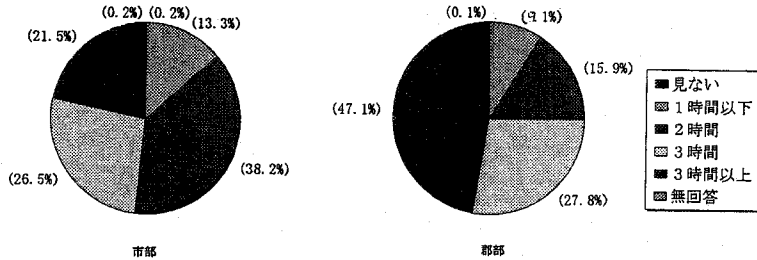


図5-1 TV視聴時間

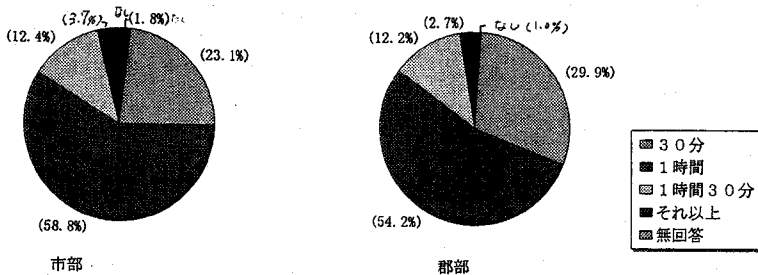


図5-2 勉強時間

TV視聴時間は郡部のほうが長時間で, 学年進行につれて増加する。市部では1ないし2時間視聴が全体の38.2%で, 男女に差は見られないが, 郡部では3時間以上が全体の47.1%で, 男子は女子よりも視聴時間が長い。勉強時間は30分ないし1時間が最も多く, 女子の方がやや長い。市部では5年生になると勉強を始めるようになり, 6年になると「する子」と「しない子」に二分される。郡部では学年進行による変化を読みとることは出来ないが, 6年生になると多くの児童が30分以上勉強するようになる。塾・習い事について市部郡部共通して行われている習い事は, 習字とスイミング・スクール(水泳)である。その他の項目に市部では男子は12種類, 女子は11種類が挙げられ, 郡部の男子4種類, 女子2種類に比較すると多く, 習い事が分散する傾向が見られた。市部では学習塾, ピアノ・エレクトーンが郡部に比べ多く行われている。学習塾は学年進行につれて増加の傾向が見られた。市部の習い事の時間帯は平日の5時から6時に集中し, 日曜日は野球やスポーツ・クラブのため早朝から活動している。郡部では火・金・土・日曜日に集中しているが, これはスイミング・スクールが火・金にあり, 場所が一カ所に限られているためである。

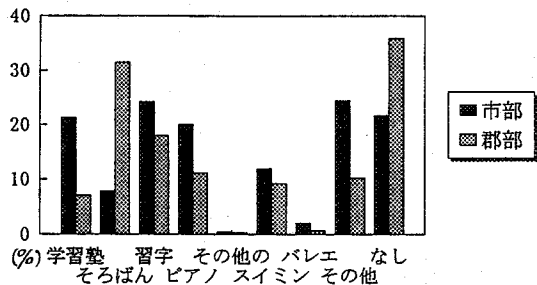


図5-3 塾・習い事

⑥遊び時間と遊び仲間

図6は平日の遊び時間について示したものである。市部では1-2時間に集中し、郡部では遊ばない児童と3時間以上遊ぶ児童に二分されている。市部72.5%、郡部の64.1%が、「もっと遊びたいですか?」という質問に「はい」と回答しており、児童の多くはもっと遊びたいと考えていることが分かる。

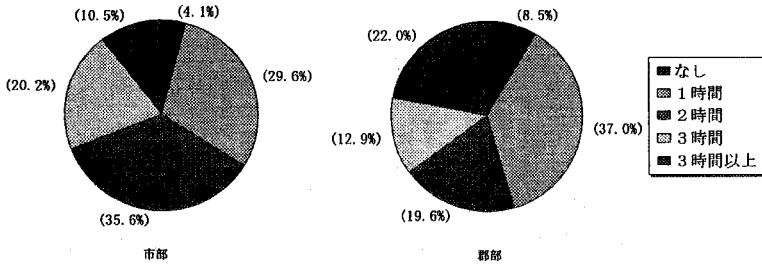


図6 遊び時間

遊び仲間は、きょうだいより友だちが多く、友だちは固定している。学年の違う友だちが郡部で89.5%、市部で78.5%あり、異年齢集団が形成されていることがわかる。男子は年長の友だち、女子は年少の友だちと異年齢集団を形成する傾向が見られた。しかし、構成人数は2-3人が多く小規模の集団である、1人遊びの割合は市部では1.8%、郡部6.8%、6人以上の比率は市部で7.5%、郡部は10.2%で、集団の大きさにも違いが見られた。

遊び仲間として選択する理由は、男子は「スポーツが得意だから」「趣味が同じだから」、女子は「思いやりがあるから」「信用できるから」でいずれも性格や特性を拠り所としている。「同じクラスだから」は市部では51.9%で、学年・男女で差は見られないが、郡部では男子が36.0%、女子は60.7%と男女に差が見られた。近所だからという地域的な理由では市部では64.8%、郡部では48.1%であった。「その他」には「親友だから」「気が合うから」「やさしい」などの心情的な理由が挙げられた。

⑦遊ぶ場所 (図7-1, 7-2)

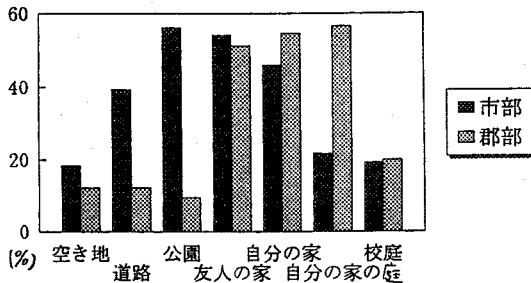


図7-1 どんどこで遊んでいるか (児童)

市部では、公園、友だちの家、自分の家(自分の部屋)、道路を遊び場とし、郡部では友だちの家、自分の家(自分の部屋)、家の庭でよく遊んでいる。市部の環境は開発が進

んではいるが、住宅が密集しているところと比較的自然の残っているところが点在している状況であり、さらに、M小学校の周囲には、遊具施設の整備した公園が数カ所ある。郡部の方が交通量も少なく自然環境も良いと思われるのだが、道路や空き地で遊ぶよりも家の中や家の庭で遊ぶことが多い。郡部は住宅の一戸当たりの面積も広く、どの家庭でも子ども達が遊ぶための十分な広さの庭を持っているので、わざわざ公園や道路に出かけて行かなくても外遊びの要求を満たすことが可能なためと考えられる。この地域に3つある公園のうち道路沿いにある1カ所をのぞいては、児童だけで行ける場所に設置されていないので活用されていないと考えられる。

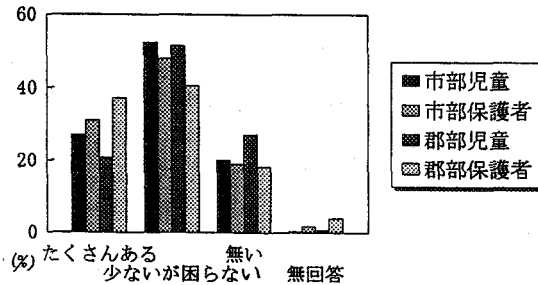


図7-2 どんなところで遊んでいたか (保護者)

保護者の全てが現在の居住地で幼少時を過ごしたわけではないので、単純に比較することは出来ないが、親世代は空き地や原っぱで最も良く遊んだが、子ども世代になると整備された公園や自分の家の庭や部屋へと、広い空間から狭い空間、屋外から屋内、自然から人の手を加えた空間へという変化が見られる。特に女子は室内で遊ぶことが多くなっている。

また、友だちと遊ぶときの約束の方法であるが、学校で約束する、電話で約束するの2つの方法が多く使用される。市部では友だちの家が近所にあるため、郡部に比べ家に呼びに行く方法が多く使用される。

⑧遊びに関する意識 (図8)

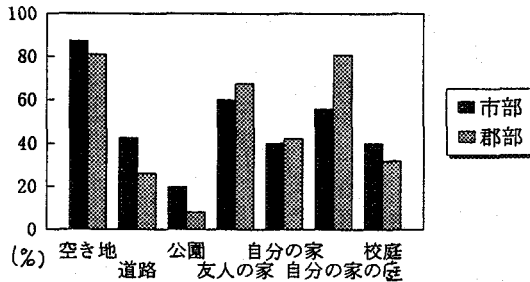


図8 遊び場への意識

市部、郡部ともに「遊び場は少ないけれども困らない」児童が大半を占め、自分たちで工夫して遊んでいることが分かる。市部では男女別に見ると、男子の方が遊び場が無くて

困ると感じている。郡部では学年進行につれて遊び場のなさを感じる女子が増加する。一方、保護者は子どもの遊び場所についてどのように感じているのだろうか。市部の保護者は、児童の意識と同じく「少ないけれど困らない」と感じている。郡部では保護者は「現在のままでよい」と感じているものが多く児童の意識との違いが見られた。特に母親(37.0%)と女子(15.2%)間でズレが目立った。

4. 考察

子ども達は仲良しの友だちを持っていて、きょうだいと遊ぶよりは友だちと遊ぶ方を好んでいる。平均遊び時間に差は見られないが、市部では塾や習い事に費やされる時間があることを考えると、市部の児童の方が時間をうまくやりくりして積極的に遊んでいるように思われる。

友だちを選択する理由は地域によって異なっている。市部において友だちの条件は、近所にて、遊んで面白く、同じクラスであることであったが、郡部では同じ条件は女子にはあてはまるものの、男子は遊んで面白い子が条件となった。このことは遊び時間の二分化とも関連しているように思われる。郡部の積極的に遊ぼうとする男子は、遊んで楽しい子を求めて移動のための時間がかかり、必然的に遊び時間が長くなる。遊び時間の短い男子は、本当は遊んで面白い友だちと遊びたいのだけれど、あきらめて、TV視聴やおやつを食べることで気持ちを紛らわせ、時間つぶしをしている。女子は男子に比べると、気持ちを切り替えてひとりで遊ぶ工夫をしているようだ。

遊び場所については、市部の場合室内で遊ぶことも多いが、屋外の遊び場も比較的多く整備されており、遊びの場所は多様である。郡部の遊び場所は、自分か友だちの家(庭・部屋)に限られてしまっている。空き地や自然環境が残されている地域であるのに、殆ど利用されていないのが現状である。そして、郡部の児童自身、遊び場が少ないと感じており、従来遊び場と考えられていた自然のままの空き地や原っぱなどは、児童にとっての遊び場の範疇から除かれてしまっている。しかし、保護者は、「自然環境が充分残っているし、わたしたちが子どものときには山の中で日長一日遊んだものだ。」と思っているので、児童が遊ぶ場所がないと考えていることに気づいていない。自然の中で遊ぶことが現在の児童にとって、果たして魅力のあることなのかを問い直さなければいけない時期にきている。だからといって、遊ぶ場所がないから公園を作ればよいと言うわけでもない。児童が自分で行くことが出来、そこで一緒に遊ぶ友だちがいて、さらに遊びをより豊かに発展させることの出来る指導員なり、遊具が必要なのである。それらの配慮が十分に行われない場合には、家のなかでTVやVTRを視聴したり、ゲームをした方が手っ取り早く楽しむことが出来る。友だちと遊ぶのは楽しいけれど、遊びの往復に時間がかかりすぎるので面倒くさい、と言うのが実状ではないだろうか。市部の児童が時間的な条件の厳しさをかいくぐりながら上手に遊んでいるのは、遊び集団としては少人数ではあるが、遊び仲間がいることが原因ではないだろうか。

遊びは、時間・空間・遊び仲間・遊びの方法の4要素が複雑に絡み合って成立しているものである。それぞれの要素の変化を把握するとともに再構築の方法を考えていかなければならない。

最後に、調査に協力戴いた盛岡市立緑が丘小学校、藤沢町立藤沢小学校、同黄海小学校、同保呂羽小学校の児童、保護者、教職員の皆さんに厚く感謝の意を表したい。

参考文献

仙田 満「子どもと遊び -環境建築家の眼-」(岩波書店 1992)